

ものを話す時に吃る人の数は、人口の約一％というのが通説のようです。原因は不明のままですし、完全になおすのはむずかしいとも聞きます。世間の目はこの人たちを差別し、その結果内に閉じ

こもりがちの性格をつくってしまふことが往々にして

あります。伊藤さんたちは、こうした世間を責めずに、逆に堂々と吃音者を名のり、積極的に世の中に出てゆく会を作り、十

内なる差別に反発

「吃音者宣言」の編著者 伊藤 伸一

「私も奈良から上京して、東京の大学に入った時、矯正所に四月ほど通いましたが、結局はなおらなかつたんです。私たちがその後、言友会運動を少しずつ広げて行ったのは、この、どもり・はなおらないという共通認識があったからです」

「・どもり・は、ものを話さな

の目とは別に、自分で自分を差別の中に置いてしまふことで、

す。肢体不自由とは異なつて、聞き直ることがむずかしい障害だ、というのはここです」

「なんとか・どもり・をなおそうというこだわりが、この、内なる差別・を生むわけですから、私たちは逆に、なおそうとは思うまい、吃音者であることを隠さないで、社会に参加し、自分たちを解放しようとしたんです。数多い吃音者の中で、私たちはまだ少数派ですし、この、なおらないもの、という認識には反発も多い。しかし、会も全国で三千人ほどになり、「どもりは障害でなく個性」と考えることに自信をふかめています」

「・どもり・の子を持つお母さんたちに言いたい。・どもり・を障害と見るお母さんの目が、逆に子どもを壁の中に追いこんでしまふということを……」

〈社〉

いとう・しんじ 一九四四年奈良生まれ、明大卒。現在、大阪教育大(聴覚・言語障害児教育)講師。本書はたいまつ社(東京都新宿区百人町一三三―一四)刊、六八〇円。

